



木もれびの森の虫たち- 9 -

長い梅雨が明けてアツという間に猛暑となりました。昆虫は変温動物ですが体温が上がりすぎると弱ってしまいます。虫たちはどのようにして暑さを凌いでいるのでしょうか？暑い日中には森を散策しても余り虫たちに出会いませんが、一番目につくのがザトウムシです。主に肉食ですがなんでも食べるみたいです。昔の子どもは脚をもいで遊んだそうですが、皆さんは如何ですか。長い8本の脚を絶えず動かして、目の不自由な人が杖で周りの様子を探るように動いているのでこの名前がありますが、ユニークな生き物です。7月に観察できた虫たちの1部を紹介します。幼虫や成虫、生まれたてのホヤホヤなどいろいろな形態で見られます。ハチも多く見受けますので注意しましょう。(海野)



ザトウムシの群れ



ナガゴマフカミキリ



コクワガタのメス(羽化直後)



クサギカメムシの幼虫



ハチの巣

木もれびの森の外来種植物

ワルナスビ (ナス科 ナス属)

この森の林縁では今の時期、茄子の花に似た白色または淡紫色の花が見られます。花の中心の黄色の葯はバナナのような形で目立ちます。観察しようとして身体が触れると、きっと痛い目にあいます。茎や葉裏には鋭い棘があり注意して手袋をしていても刺されることがあります。

どんな形のナスビが生るかと思々観察すると、緑色の縦じまが入ってスイカに似た径 1.5cm ほどの実が数個の房となっていました。この果実は花序軸に左右交互に行儀良く付き、熟すと光沢のある黄色に



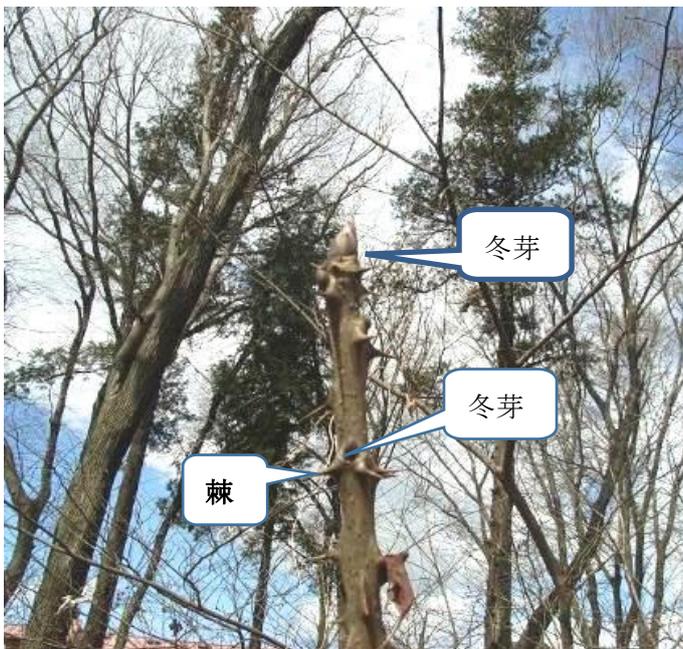
変わります。この果実を割ってみると20個ほどの種が入っていましたが、この毒に包まれた種はどのような形で広がるのでしょうか。同じ仲間の在来種で棘のないイヌホウズキの果実は軸の先端にまとまって付き、その熟した果実は真っ黒になります。

この鋭い棘や家畜などにも下痢や嘔吐などの被害を与える全草に含まれる毒で嫌われていますが、それ以上にその繁殖形態で非常に嫌われています。駆除しようと草を引き抜くと、地中に残った地下茎の細かな断片からスギナなどと同様に再生するのです。畑や牧草地はもちろん街路脇のわずかな隙間でも繁殖するため、その駆除には相当の労力が必要とされます。でも、夏場になると刈り取られることが多く、その有毒の黄色に熟した実を目にする機会は意外に少ないです。(岩田)

ナス科ナス族、北米原産の帰化植物、昭和初期から全国に拡散、花期は6-10月。



ハリギリ (ウコギ科ハリギリ属)



左の写真のような、冬枯れの森の中で高さ1m、直径2cmくらいの杭のように立っている大きな棘のある低木を何本も目にするところがあるでしょう。何だろうと不思議に思っている人も多いのではないのでしょうか。タラノキかな? いいえ違います、ハリギリです。先端の冬芽はチョコレート色で、つやがあります。冬芽は先端だけでなく、幹にもあります。冬芽のすぐ下には大きな棘もあります。4月になると冬芽はほころび柔らかい新芽が現れます。天ぷらにすると、とってもおいしい食材です。下の写真はこの森の中にあるハリギリの大木です。8月の暑い盛りには、天狗のうちわのような大きな葉を茂らせて盛んに光合成をしています。この木は直径40cmもあります。材は木目が美しく

加工して使われます。ハリギリの丸太をカツラむきに薄くむいて薄板を作り、それを何枚か重ね合わせて合板にします。杳(もく)の美しさはケヤキのようだというのでニセケヤキともいいます。センとも呼ばれ、北海道ではセン合板として海外にも輸出しています。桐の代用にもなりますが棘が多いのでハリギリと呼ぶのでしょう。冬、こもればの森の中で見かける杭のようなハリギリの幼樹も春になると天狗のうちわのような葉をつけます。しかし大きく育つことができず、ほとんど枯死します。幼い時は光が少なくても育つのですが、やがて樹木の大きさに比べ、光の量が少ないために枯死するのです。厳しい現実です。(鳥飼)

